

まえがき

時の移ろいというものはあらゆる事柄を忘却の彼方に押しやってしまう。私が師事した神道夢想流杖術の乙藤市藏先生は、術技において傑出した方であつたばかりでなく、心の凝縮、人間性、そのいづれも比類なき方でした。と言つても、先生に会つたこともない者にとつては、判らない。せめて弟子達にはどういふ方であり、私にとつてどういふ方だつたのか、その幻影だけでも伝えたいと願ひ、様々な場面での先生の言葉をまとめてみました。

元々私は清水隆次門下でしたから、乙藤先生のお顔は存じ上げておりましたが、親しくお話を伺うようになつたのは清水先生が亡くなられた昭和五十三年（一九七八）六月以降です。私は四十二歳でした。その乙藤先生が平成十年（一九九八）に他界されてから早くも十六年が経ち、私も傘寿の老軀になつてしまいました。したがつてこの記録は、昭和五十三年から平成十年までの二十年間の会話の記録でもあります。

私は清水門下としての立場があつたため、清水先生亡き後、三年の喪に服したのですが、この期間がこの上なくまことに貴重な、ほかの人にはない珠玉の時となりました。

乙藤先生は白石範次郎門下として清水先生の弟弟子ですから、私と乙藤先生は系譜上叔父と甥

の関係になります。人間関係の特性として、叔父と甥の関係は最も話がしやすい関係です。もし乙藤先生が清水先生の兄弟子で「伯父」だとだめなのです。三年の喪に服した後、私は乙藤先生に再参の礼をとり師弟となつたのですが、この叔父・甥の仲だからこそ、不躰かつ不遜な質問や挑戦的なつつかかりが許され、様々な口伝を得ることができたと言えます。そのため、その親近感が、師弟の礼をとつた後まで続くことになつたのはまさに冥助めいじよとしか言いようがありません。

第一部「のこしたい師の面影 乙藤市藏先生語録」の過半は私が主宰する神道夢想流杖心しんどうむさうりゅうじょうしんかい会報「杖」に連載したのですが、この度手帳のメモを見返し、今まで書いていないことも収録しました。基本的に全て私と乙藤先生の個人的関係の中での話ですが、乙藤先生に会つたこともない人にとつては、先生の人柄と追求の切り口を知る良い材料になると思います。

しかし、当然ながら術技に関する核心は「口伝」ですから伏せています。乙藤先生は私が「こはおかしい。納得がいきません」というと相手をして下さったり、私が「どうしても納得がいきません。本当は違うのではありませんか？」との問いに対し「ようこそ聞いてくれました。ほんのことはね」と話して下さったことが何度もありました。「この話はうちの者（地元の弟子）には聞かせていないから、福岡に帰つたら話しておかねばならんね」と言われたことから判断すると、恐らく本書の過半の内容は先生と私との対話に同席した松村重紘こうぶかみん（紘武館館長）だけが知るものであり、先生が帰福後に、他のどなたに伝えたかは判りません。

また、先生の「ご家庭のことなど、普通なら他言をはばかりる個人的なことも多くありますが、先生に対する尽きせぬ恋慕の情とも言える敬愛心のなすところとお許し下さると思います。何しろ先生と私は「百年の友」ですから……。

なお、一部本文と関係する写真を掲載しましたが、これらは乙藤先生の写真帳から拝借したものであり、貴重なものです。また会話の場は、紘武館での対話や、お年始その他で先生宅に伺つた時の対話であり、また電話での対話や一部お手紙もとり上げています。

第二部は、私の最初の師である清水隆次先生との出会いと、その人となりを記しています。第三部は、季刊誌『道』みちに連載した「師につくし 自己を磨き 人を育てる」に追補しまとめたものです。私が神道夢想流杖術を自ら追求しつつ指導をするなかで感じてきたことをつづけています。本書は、『道』誌連載のものと、私的記録である「乙藤先生語録」を合体させて意味を持たせるという難作業だったが、『道』誌木村郁子編集長のご理解を得て、編集部の手葉由利枝さんが見事にまとめて下さった。衷心より厚く御礼申し上げます。また原稿の整理は門人の大槻潮さん、内容の検討と校正では安田祖心君の手を煩わせた。併せて謝意を表します。

平成二十七年六月

著者しるす

〈一〉

松井さんとは百年の友とよ。

(えっ! どういうことですか? なぜ百年ですか?)

あの本があるとよ。あれは百年はもつとよ。

平成十年一月三日、例年通り鯛を抱えて乙藤先生宅に伺った時の数時間に及ぶ歓談の一部です。この約一カ月後、乙藤先生は帰らぬ人になってしまいました。

会話の本とは、乙藤先生のご指示により作った技術書、乙藤市蔵監修・松井健二編著『天真しんご 正伝しょうでん 神道夢想流杖術』(壮神社刊)のことを言っています。

「友」と言っただきつたのは、時空をこえて先師を求めて同じ道を行く「同行どうぎょう二人」と思っただけか。

先生の訃報に接したとき、「百年の友」とは「わしの道筋を外すなよ」というご遺言であったものと悟りました。

これは誰がつくったと？

(お父さん、いま家には私しかおらんとよ。私がつくったと。)

そうか。うまか！

(初めてお父さんに褒められたと。)

私が持参した鯛を娘さんの美津子さんがさばき、身はさしみとして出し、残りで鯛汁をつくって出しました。その鯛汁を食べた時の親子の会話です。

一生を神道夢想流の追求と伝承に捧げ、家庭を顧みることが無かった父親の、ただ一回の褒め言葉だったかと思うと、胸がふさがる思いがした一方、その一瞬の親子の深い情けの交流に少しでも寄与できたと思うと、嬉しい、心温まる時間でした。

その後、福岡の弟子夫婦他が年賀に来られ、酒盛りになりました。



帰幽一ヵ月前の自宅療養中の乙藤先生を囲んで
左から筆者、先生、福岡の弟子鬼木正道氏

月がく 出た出たく 月が出たく

有名な炭坑節の一節です。乙藤先生は帰幽直前に病室で炭坑節を口ずさんでおられたとご家族から聞きました。

先年に愛弟子の伊橋典之氏が他界。現世に思い残すことがなくなり、寂寥せきりょうたる月の光のなかを旅立つてゆかれたのかも知れません。

ああ、それでよかと。
それはなかと。

乙藤先生の特質を示すよい例なので、書きます。ある時紘武館における乙藤先生との歓談の場に先輩のN氏が来た。大変自己主張が強い方なのですが、急に「先生、考えたのですが、返し突きの時の足はこれがありだと思うのです」と立って膝を突っ張って捻り、両足の小指側の線で立ち、足の裏が見える形をやって見せた。乙藤先生は「ああ、それでよかと」と言われ、N氏は満足。しばらくして帰られた。

帰ってから私と松村両名は「先生は、それでよかと、と言われましたが、本当ですか？ それはないと思うのですが」とお尋ねした。乙藤先生「それはなかとよ」とすました顔。「だったら、どうして『それでよかと』と言われたのですか？」「本人がそう確信しているのだから、それはそれでよかとよ」こんな会話だったので。先生は自我の強い人の思い込みに関して、決して強く反対はされなかつた。本当のことを教える義理はないからです。弟子に対してとは全く違う対応をされた方だったので。